

登山時報

2021年4月15日発行(毎月15日発行)
1987年3月23日〜第三種〜承認
ISSN 1880-4993

5

谷川 上越の山々

2021 No.555



日本勤労者山岳連盟

機を見るに敏!

ネパール隊 冬季未踏のK2速攻

無酸素登頂者も!

近藤和美

本年1月16日、ネパール隊が世界第2の高峰K2（8611m）の冬季初登頂に成功した。登山K2登山隊を3度率いた近藤和名誉会員に論評していただいた。

（編集部）



日没迫る山頂でネパール旗と英国旗をあしらった布を掲げる Nirmal Purja Magar

登頂狙うネパール隊

K2冬季初登の報に接した時筆者は、ついに登られたかという思いと共に、それがネパール人によってということ、17年前のある出会いを思い出した。

2004年、3度目のトライでようやくK2頂上に隊員を送れたその夏。スイス商業公募隊に雇われて来ていたシエルパのミンマ氏らとも親しく交流した。その折り氏が「ネパール人によるアンナプルナ冬季登山計画書」

と資金計画案を見せてくれた。それは、旧来生計のために外国人に雇われて山仕事に従事してきた彼らが、自らの嗜好で登頂を目指すという意識変革到来を私に予感させるものだった。

ミンマ氏の冬のアンナはその時は実現しなかったが、その後、セブンサミットトレックス（SST）を興して雇われる立場から脱し、さらに11年にはネパール人最初の8000m峰14座完登者ともなった。

1980年代初頭、ネパール

政府が冬期登山を解禁し、超高峰の冬季初登争いが始まった。日本隊も多少からんだが、大きな成果はポーランドを主とした欧州勢が占めた。

当然カラコルムの高峰にも目が向けられ、ネパールより高緯度で厳しい気象条件に手こずりながらも、16年までに13座の登頂が成された。

唯一K2のみが数度の挑戦を跳ね返して難攻不落の感もあった。

K2は新疆ウイグルとの国境

を分けているが、ほとんどがパキスタン側の南東稜から挑戦されている。

今冬はカナダ、スウェーデン、地元パキスタン、さらにネパール3隊がゴドウィンオースティン氷河上のBC（5100m）に集結した。

活動主力となったネパール隊のうち、先ず国際ガイド資格を持ち、14座完登も間近なミンマ・G（ギャルゼ34歳）らの3人隊が12月19日にBCに入った。ミンマGは昨冬に続く挑戦である。

次は一昨年、わずか半年間で14座を制覇するという驚異的な戦略と体力を示したニルマル（ニムス）・プルジャ率いる6人隊。彼は18歳で英国傭兵グルカ連隊に入り、山とは無縁だったが、8年前に故国でトレッキングし、そこで山に恋したという。マガール族で高地生まれというわけではないが、高所に強い体質を自覚し、シエルパを雇用する立場で、短期間で高密度な経験を積んだ。今回もグルカ退役後の仕事仲間



で14座完登者のミンマ・デイビツド(31)ら、なじみのシエルパと12月26日BCに到着。

最後は兄に続いて同国2人目の14座完登者、チャン・ダワ率いるSST商業公募隊。シエルパのルート工作班を含む各国か

らの45人で構成され、12月29日に入山した。今や大衆化した観もあるエベレスト公募隊には少なからず高峰初級者も含まれるが、さすがに冬のK2を目指す顧客は費用軽減や許可取得の手間を省く目的で応募した欧州の

山頂速攻を敢行

彼らはネパールの気象学者、K・B・マナンダール氏※1と契約していた。

ミンマG隊は早速12月21日にC1(6000m)設営。23日には難所ハウスのチムニーを越えてC2(6700m)まで固定ロープを設けた。

悪天候が優越する中の短い好天を捉えて29日、ニムスとミンマG両隊協力して長い岩場が続くブラックピラミッドを突破し、7100mまでルートを延ばす。

さらにC3(7300m)へは3隊協働で到達。

だがその後、雪嵐到来で8日間BCに釘付けさせられた。

ようやく天候が回復しC2に登り返すと、ほぼすべてが吹き飛ばされ壊されていた。

数日後、C3まで再荷揚げし、さらに7800mのC4地点までルートを開いた。

その後、1月の15、16日に稀な好天が短期に訪れるとの予報がもたらされた。

元もと高所適性があつて毎年高所労作もこなしている彼らはこの好機を逃さず、協力して山頂速攻を敢行しようと一致した。

ニムス隊とミンマG隊の9人にSST隊からもソナが加わる。ニムス以外は全員シエルパ族である。

15日、快晴無風の下、C3に入る。C4は未設営だったので、ここから長駆アタックすることを決めていた。

16日午前1時から2時半にかけてC3を出発。この日も微風。マナンダール氏の予測は正確なものだったが、寒気は厳しかった(氷点下約50℃)。

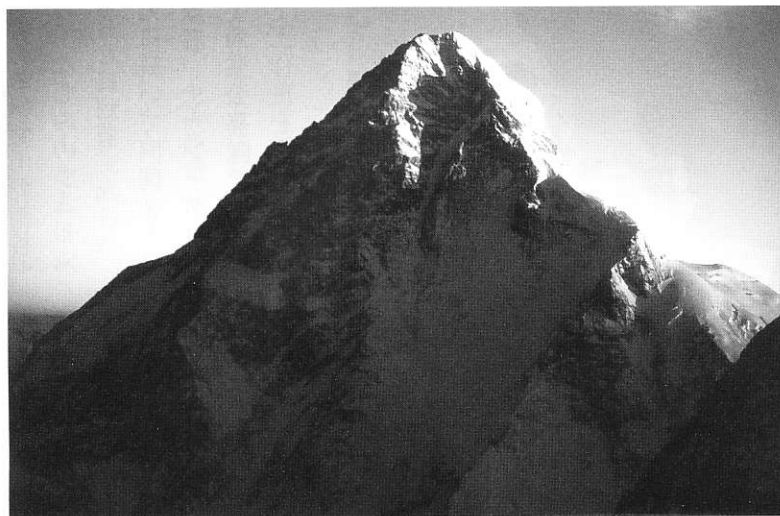
南東稜の肩(C4地点)を通過すると最難関のボトルネックに差しかかる。セラックが頭上に張り出す下を左斜上して抜けなければならぬ狭いクローワールで、約1000m、傾斜50〜60度の氷壁は頂上への最も危

※1) 14年10月、トロンパス(5416m)周辺で39人のトレkkerが大量死した惨劇の起因となった、ベンガル湾起原のサイクロンがアンナプルナ山群で吹雪をもたらすと警告していた人物である。筆者も13年冬のアンナプルナと18年のマカルーで予報を依頼した。

機を見るに敏！

ネパール隊 冬季末踏のK2速攻

無酸素登頂者も！



K2 曙色 右のスカイラインが肩から頂上にかけての南東稜最上部。中間部のセラックの下がボトルネックになる（ブロードピークから近藤和美撮影）

険な部分だ※2。

あまりの寒気にミンマGでさえ登高を諦めかけたが、ニムスの励ましで翻意し続行を決意。

登山史上の偉業達成

ロープを張りながら突破し、

いよいよ頂上が迫った。

先頭は山頂10m手前で後続を待ち、10人そろって16時45分に絶頂に立った※3。

過去13座の冬季初登のほとんどにネパール人（シェルパ、ゲルン、タマン、マガールなど諸族）がサポートの任に就いていたが、

登頂者に選ばれることはなかった。

しかし今回、彼らは自分らが主人公の隊を組織し、そして見事登山史上の偉業を成し遂げたのである。

彼らは遠征実現のためにスポンサー獲得に務め、クラウドファンディングで資金を集めた。ネパールの誇りも謳い上げたが、世界中の支援者たちにも感謝したいと語っている。

なお、ニムスは唯一無酸素登頂に成功。冬季にこれほどの高峰でのこの業績も特筆に値する。

疲れた身体での暗夜の下降は人間の限界を試すものだったというが23時前後にC3に帰還。8人が何らかの凍傷を負ったが誰1人欠けることなく翌日、天候が崩れてきた中、BCに帰還。彼らの強靱さを立証した。

想起するのは04年夏の我が登山隊。3日間だけ晴天との予報に速攻を号令し、隊員もよくこれに応えて登頂を勝ち取った。

ところでBCにはSST隊の

多数の外国人もいたわけだが、この時点では順応不足でアタックに加われなかった。

そしてこの16日を皮切りに、ナングパルバット冬季初登の勇者らも含む5人が犠牲になり、改めて冬のK2が生易しくないことを知らしめた。

・今回の記事執筆に当たって、カトマンズのTikaram（04年登山K2隊での登頂者。現在Bachchu Trekを経営）& Sidhhartha Gurung父子に情報収集でお世話になった。記して謝意を表したい。

・登頂時の模様がYouTubeで視聴出来る。(1) Nepalese team at the summit of K2 - K2 Winter 2021 - Nimsdai Purja i YouTube (2) <https://www.youtube.com/watch?v=10PnKsACTWU0>

※2) この崩壊雪崩で11人が死亡した08年夏の例もある。04年の登頂隊員である川嶋高志（現登山事務局）も、眼下は3000m切れ落ち、頭上には押し掛かる懸垂氷河とロシアンルーレットを感じたという。

※3) K2冬季初登頂メンバー

- ① Nirmal Purja Magar
- ② Mingma David Sherpa
- ③ Mingma Tenzing Sherpa
- ④ Gyalzen Sherpa
- ⑤ Pema Chhiri Sherpa
- ⑥ Dawa Temba Sherpa
- ⑦ Mingma Gyalze Sherpa
- ⑧ Kilu Pemba Sherpa
- ⑨ Dawa Tenzing Sherpa
- ⑩ Sona Sherpa